

## 監修のことば

『インフォームドコンセントのための図説シリーズ 肺がん』の第1版が誕生したのは16年前の2001年です。その後2004年、2009年、2011年にそれぞれ第2、3、4版が刊行されてきました。この間世界肺癌学会の活動により肺がんの病期分類や腺がんの組織分類が大きく変わりました。何よりも大きな進歩は線がんを中心としてドライバー遺伝子の同定とそれを標的としたチロシンキナーゼ阻害薬の導入による治療成績の飛躍的向上です。Ⅳ期非小細胞がんの治療成績が完全切除例に匹敵するような進歩は誰もが予想できませんでした。これらの情報については改訂3版以降に反映されています。その後も学問は進歩を遂げ新しいドライバー遺伝子変異の同定や治療に対する耐性機構の解明と耐性克服を目指した創薬も可能となり、すでに実地医療で使用できるようになっています。さらに従来まったく治療効果の見られなかった免疫療法が、免疫チェックポイント阻害薬の導入により長期生存をもたらすことも証明されてきました。これは改訂4版にも記載のなかった新しい成果です。これらの進歩もあり肺がん治療のアルゴリズムは急速に変化しつつあり診療ガイドラインも常にup-to-dateに改訂する必要があります。一方、エビデンスを創出するための臨床試験体制の整備も進んでいます。初版の出版は日本臨床腫瘍学会の設立の1年前で、2003年には臨床研究倫理指針が施行されると共に医師主導治験が可能となりました。米国のFight Against Cancerに遅れること36年の2007年にはがん対策基本法が実施されました。2014年には人を対象とする医学的研究に関する倫理指針(統合指針)が施行され、わが国における臨床試験研究も欧米並みになってきました。

有効な治療手段の評価を手際よくしかも科学的・倫理的に行うことはがん患者にとり喫緊の課題とされます。肺がんの分野ではLC-SCRUMの組織化も進み、ドライバー遺伝子を効率よく発見し、それに対する適切な臨床試験を行う体制も具体化し、Precision Medicineをいち早く患者さんに届けるための努力も進んでいます。少し頑張れば新しい有効な治療法が毎年出現する現状を踏まえ、肺がん患者さんには改めて“がんの治療は決してあきらめないこと”を認識してほしいと思います。

2017年6月

日本臨床腫瘍学会事務局特別顧問  
西條 長宏

# 序

肺がんは罹患数、死亡数ともに激増しています。これに関しては日本でその傾向が特に顕著になっています。年間 36 万人もの患者さんががんで亡くなりますが、そのうち実に 7 万人が肺がんで亡くなります。

たばこと肺がんは密接な関係があると言われていますが、日本人の喫煙率が、昭和 40 年に 80% 程度だったのに対して近年では 20% 程度と減少しているのにも関わらず、肺がんは増えていることに注意が必要です。これは喫煙とは関係の薄い要因が肺がんの発生に関わっていることを示唆しています。たばこを吸わない方でも油断せずに検診を受けることが重要だということになります。

たばこと関連の薄い肺がんは腺がんという種類の肺がんでこのタイプの肺がんは女性の肺がんのほとんどを占めます。もっとも顕著な特徴は肺の端の方（肺野末梢といいます）に発生するという点にあります。また胸部 X 線写真に写りにくく、胸部の CT での検診が有効だということも重要です。

このような方法で肺がんを早期発見することは理想的なことですが、一方で進行した肺がんが見つかったとしてもこの数年で治療法が劇的に進歩していますから、過度に悲観するには及びません。*EGFR* 遺伝子変異や ALK 陽性を呈する肺がんなどは、これまでの抗がん剤に比べて比較にならないほど効果をもたらす薬が開発されています。そして何より重要なことは、これらの遺伝子異常とそれを標的にした薬（分子標的薬）の開発が後を絶たないことです。さらに昨年の米国臨床腫瘍学会・欧州臨床腫瘍学会では、がん免疫に関するとても重要な報告がなされました。

これらの肺がんに関する診断や治療の進歩はまさに日進月歩で、書物として発刊するのも追いつかないほどです。最近ではこのような理由で、書物にするよりもインターネットによってよりタイムリーに情報を発信することが多くなっています。

このような状況の中、本シリーズも改訂の運びとなりました。現時点での可能な限りの最新情報を取り入れ、その新たな情報とともに変わらない肺がんの基本も大事にして、できるだけ患者さんにわかりやすく説明を盛り込んでいます。肺がんに関するすべての情報を理解する必要はありません。それは私たち専門家が知れば良

いのです。患者さんをご自分の肺がんに関する情報を、可能な限り深く理解することが重要なのです。早期肺がんから進行肺がんまで、あらゆる種類の肺がんに関する情報が本書には網羅されています。

本書が一人でも多くの肺がん患者さんのお役に立ち、肺がんに関して理解が深まることで少しでも不安が除かれることを祈るばかりです。

2017年6月

順天堂大学医学部呼吸器外科学講座主任教授  
鈴木 健司